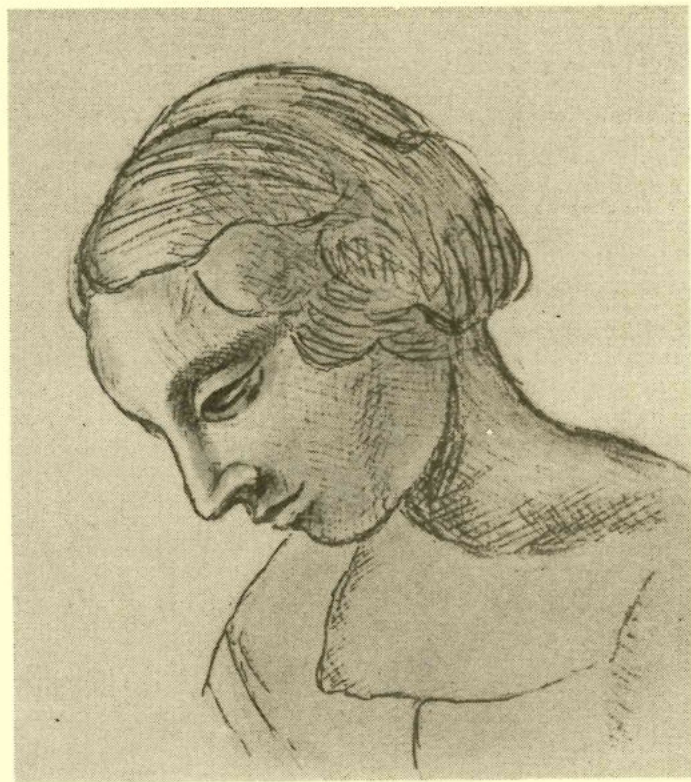


季刊

四

季

第六号



四季社

一九八五年四月十日発行

定価 三〇〇円

目次

季刊四季・第六号

デザインチ「女の頭部」	小高根太郎模写	表紙
立原道造	堀 辰雄	表紙裏
はなうた(一)	植村 清二	4
春夢(岑参)	松枝 茂夫訳	6
失題	藤沢 恒夫	8
春殘	堀 多恵子	10
失題	浅野 晃	12
近江の春	河村 純一	14
石上の桜	たかはし しげおみ	16
雪の日	江頭 彦造	18
雛まつり	牛尾三千夫	20
寂	高橋 渡	22
小金井山荘	国友 則房	24
肉親	田中 克己	27
鏽・詩人ロルカに	石濱 恒夫	28
座席	小杉 茂樹	30
ゼーヤ河	大野沢緑郎	32
レンブラント賛歌	小高根太郎	37
拾い屋安吉	福地 邦樹	38
目覚め	石山 直一	40
古都早春	坂口 允男	42
希望の芽	花井タヅ子	44
終電車	南川 正純	46
同人名簿		48
同人略歴		49
同人規定・会員規定		50

立原道造

堀 辰雄

とうとう立原道造は三月二十九日に死んでしまった。二月ごろからかなり絶望にちかい状態になつてゐる事はきいてゐたが、こんなに早く死ぬとは思へなかつたので、どうも何もかもが惜しまれてならない。

立原は去年の秋盛岡に一月ばかり滞在してから、漸く元氣になつて歸つてきたが、冬のはじめ再び長崎への旅に赴いた。非常に元氣よく旅立つていったので、これならもう好いと思つてゐた矢先、その旅先でおもひがけず病を重くしたのである。歸京後、すぐ東京療養所に入院したが、既にすべては遅かつたのである。

立原はまだ二十六であつた。「優しき歌」と題せられた一聯のソネット、断片若干、一冊の日記、及び友人らへの數多くの美しい手紙を残して死んでいったが、それらによつて立原が今後我々の間に、生前よりも、一層独自の流儀で生きるだらう事が我々にとつては唯一の愉しみである。

我々は「四季」の次號をもつて立原の追悼號に充てたいとおもつてゐる。以上の遺稿も出来るだけに載せたいとおもふ。それから又、立原の手紙などで、好い手紙を御所持の方があつたら、編輯部宛にお知らせ下されば幸甚である。

(「四季」昭和十四年五月号)

はなうた（一）

植村清二

午後の柔らかな外光を浴びて、熱いブルックボンドを嘔ると、老残の身も心も暢びやかになって、おのずからはなうたが、口辺に漂う。生れつきの音痴で、五線譜やお玉杓子には縁がないが、兄の背中に負ぶさった頃からの子守唄、幼稚園で教わった「桃太郎」や「兎と亀」などの童謡（その時はまだ童謡とは言わなかった）、「小学唱歌」「中学唱歌」、軍国主義時代の軍歌、教会のバイブル・クラスで覚えた讃美歌、高等学校で歌った校歌・寮歌・應援歌（この中には自作のものもある）、映画や演劇の主題歌、これはその折々の流行歌や、東西の民謡を加えると、数だけは数百にも上るだろう。勿論それらがみなはなうたになるわけではない。ふだん低唱微吟するのは、十か二十ほどの種類である。

「小学唱歌」では「水師宮の会見」である。歌詞もよく纏まって、曲譜も安らかである。勝って驕らず、敗れて悔いず、末尾の一節の

砲音絶えし砲台に、

ひらめき立てり日の御旗

は、曲終って雅を奏する趣がある。竹柏園主人の数多い唱歌の中でも、秀作の一つであろう。

国定教科書というものは、御時勢で姿を消した。しかし国民全体が共通の記憶と感情を持つ曲というものは、あった方がよいと思う。「水師宮の会見」は、軍歌ではないが、戦争の一場面を主題にしているために、軍歌と同じように扱われている。真下飛泉の「戦友」も、軍歌ではないが、同じような扱いを受けている。子供の頃、大阪の市中を行進している八連隊の兵隊さんが、これを歌っているのに、たびたび出会った。しかしこの歌には反戦的な調子があるといって、軍の当局はあまり好まず、支那事変以後は殆ど禁止された。そして戦後はまた軍歌として葬り去られたのだから、大衆に広く歌われたにも拘わらず、不幸な運命であった。奉天の郊外に建てられた「此處は御国を何百里」の大きい歌碑も、倒され砕かれたことであろう。

僕はこの歌を、最初から末尾まで歌うことができる。しかし殆ど歌ったことがない。長いスタンザは、はなうたには禁物である。

讃美歌をはなうたにするのは些か畏れ多い、少なくとも不謹慎であろう。しかしときどき何かの調子で出てくるものは仕方がない。口誦むのは、讃美歌五二七番 特にその第三節である。

シオンのむすめ語れかし

わが愛の君に

野辺にてか幕屋にてか

会いまつらざりし

歌詞はスエインの原作、曲はルイスの作曲をヒューバーメインが編曲したものだという。これを低く歌っていると、教会の粗末なベンチが、目の前に現れてくるから不思議である。

春夢 しゅんむ

岑参

(松枝茂夫訳)

春の夜、遠い江南にいる親友を夢みて……。

洞房昨夜春風起	洞房昨夜春風起
遙憶美人湘江水	遙かに憶う美人湘江の水。
枕上片時春夢中	枕上片時春夢の中、
行盡江南數千里	行き尽くす江南數千里。

昨夜奥まった寢室にいて、春風の立っただけはいいを感じ、はるか江南の

湘江のほとりにいる友人の上に思いを馳せた。そのせいだろうか、枕

上しばしまどろんだ夢の中で、友を訪ねて江南まで数千里も歩き通し

たことであつた。

△遙憶美人△『全唐詩』に「故人尚隔」とするのは誤りか。ここの美人は「君子」の意で親友を指す。

(岩波文庫「中国名詩選」中より)

失題

藤沢桓夫

詩集

卓上に

玉蟲を這わしむる

海峡は

雪昏く

海は尚昏し

春 残

堀 多恵子

春残何事苦思郷、病裏梳頭恨髮長。

梁燕語多終日在、薔薇風細一簾香

春も過ぎようとするこの頃、どうしたわけか大変ふるさとが恋しく偲ばれてなりません。病の床で髪を梳きますと、すっかりのびてしまっているのに気づき、なんとも情けない思いになります。梁に巢を造っている燕たちはよく囀り、一日中其処におりますし、庭に咲く薔薇の花は微な風にも揺らいで、簾いちめんに良い香りを送って来ます。

この七言絶句は李清照の詞詩の中でも辰雄が特別に好きだったようです。「薔薇風細一簾香」と七字を書いて、壁に止めていた頃がありました。病の床で、春が過ぎ、夏を迎えようとしている病人の辛さのようなものを感じ、それが私の中にも甦って来るようです。

私が書の指導を受けている西川寧先生の門弟たちによる作品展が毎年銀座の画廊で開かれています。私は昨年、この「春残」の三句と四句を半折に書き、仲間に入れて頂きました。誠に不出来でしたがいつも心にあった李清照の詩を作品にすることが出来た喜びがありました。何かほっとしています。

詞の方が詩よりずっとうまいと言われている清照の詩も、この「春残」は「甚工緻」であるということのようです。

失題

浅野 晃

晴れた空を千羽の鶴が翔けつていった
子供ばかりの巡礼の列が過ぎていった
枯れて立つてゐる木々の間に日は沈んだ
こまやかに組み合はされた手と手の間に日は沈んだ

あの時から何時が経つたのか
いや何日が何年が経つたのか
大きな汐はまだ引いてゐる
子供たちの歌声はまだ聞こえてゐる

いまはもう音だけだ 音だけだ
——こちらカイロ 応答せよ
——こちらダマスコ 応答せよ
——こちらイスタンブール
——こちらコリント
——こちらパレルモ
——こちらアルジェ
——応答せよ 応答せよ

音だけが そしてしだいに乱れあひ
低くなり そしてあやふく消えかかり

近江の春

河村純一

雪なかに麦やや伸びし田もありて風の止みたる蒲生野をゆく

梅林をめぐり帰りて靴をぬぐやはらかき土すこしこぼれぬ

わが小間に檀香梅の香のこもり曇りのつづく窓明け放つ

城山の鐘とききは空耳か庭よく晴れて風少しあり

黄なる雲いさよふに似てあはあはと山茱萸の花咲きいでにけり

あちこちのせせらぎ響き合ふ岸の朝を雨降る余呉のみづうみ

麦秋の黄なる光のひろがりに伊吹ふもとの村うづもる

蟠踞する伊吹ふもとの田居遠くまれまれに人ら見えて動くも

堂の鍵ぶら下げし老と辛夷咲き小川せせらぐ径に別れき

あたたかき雨ながめある留守番に友来り呉れぬ貝母一鉢

石上いそのかみの桜

たかはし しげおみ

第一種軍装、白手套で ぼくたちは祈った

武運長久 そして再会を

まだ開かない桜の蕾の下で

別れの盃をかわした

行先きは知らなかったが

この休暇が終れば 明日にも

帽振れ！ で見送られることになっていた

どうやっていったのか とにかく

南へとんだやつは 消えていった

北へいったやつも ゆくえしれない

ひとり東へむかったぼくは

三日目にやっと任地にたどりついた

ああ あの日から丁度四十年

夢のあと を偲ぶすべもない

ここ人工都市 むかしの基地跡に はからずも

舞いもどったぼくは思い出す

石上の桜の蕾を いつまでも

それを見上げていたおまえの頬が燃えていたのを

雪の日

江頭彦造

幻想 I

天女の腕の あいだから

羽搏け 白鳥

天に 向って

羽搏け

ほんのりと 淡い

かなしみ

優しい 胸への

想い

幻想 II

屋島に敗れ 祖谷山を

落ちのび 杉 谿

阿佐家

雪の 薄の

穂の なかに

そばだて雑炊

すする 里人

雛まつり

牛尾三千夫

因幡もちがせの用瀬川に、ながし雛 流す夕べの女童めわらべのこゑ

伯耆の淀江付近では、大正時代までは、
雛おさめする前に、最も美しき女雛を
抱きて、菜の花を見せるとて、菜の花
畑に出でしと云へり。

送り雛 菜の花畑に持ち出で、送る慣しも今は泯びし

古の雛のまつりをおもほへば、遠世のごとく夢心地なる

桃の花は、まだ時早く ふくらみし桃の蕾をさがし求むる

山里はひなの遊びもせずなりて、野山を走る童わらべになし

岡山県総社市付近では、旧暦三月四日
をシカノアクニチと称して、花見と云
ひて山遊びする風習があった。

今日はまた しかのあくにち、未通女せとめは、山に登りて、花見すらしも

販るさに、躑躅の花を手折り来て、田の畦に挿す。慣しなれば

美しきその歌ごゑは、遠野なる 阿部やエ女のお手玉唄よ

早池峯の山を歌ひし 童謡わらべうた、遠野の里は、雪に沈みぬ

寂

高橋 渡

いのちのあせる合図か 首の陰のあたりで音がする

鎮めきれず 銀糸でところどころをむすぶ

むすんだものの

ふりつむ雪に常夜燈は灯のともらない日目をすごす

火の山を遠景 伽藍のうつくしい湯のむらにとまる

金星は銀糸ふるわせ ほぐす

岩風呂につかる 時も体も癒えはしない

八角三重の塔 目はその反りのやさしさに束ねられ

むかし よくみたゆめ

青磁の魚形 海揚りの水滴みずしはおよぎだし

波になり光になり 炎となつてはげしくうずまいた

目さめ 窓をあける

目いっぱい 巨きななにか くるぐろ横たわっている

そのへりを 泛んでうごかないのは花辛夷にちがいない

小金井山荘

—冬から春へ—

国友則房

(1) 晩冬異変

この冬は 敗戦いらいの豪雪で
むさし野に 拡がった 大東京も
零下五十度に近い きびしい寒波と
厚い雪雲に 包み込まれて、
まるで 氷室の中の 生活だった

大通りの両端や 横町から
生垣の木蔭まで 根雪となって
長いアルプスの 尾根を作り、
裏手の軒場には 屋根を滑り落ちる
雪崩で ヒマラヤの 懸崖が出來た。

居間で ストープを炊いても
夏向きの山荘は 火廻りが悪くて、
留守居の 主婦や老人から
足を奪られた 若者たちまで
置炬燵に 潜り込んで まどろむ。
はしゃぎ廻るのは 子供らだけ、
朝っぱらから 日暮れまでも

中庭や 街角に 雪達磨を造り、
シャベルで 雪の山道やまみちを拓いて
速成ねこぞりの猫櫓ねこぞりを 走らせていた。……

今日も 朝から 粉雪こゆきが散らつき
黄楊つげも 枯木も 薄化粧うすけしょうなんだが、
明日からは いよいよ三月――
陽春の光が 万物に降り注いで
梅も椿も 一時に 花咲くだろう。

※山荘……故生田勉の出世作である栗の木のある家だが、

主人の私は『小金井山荘』と呼んでいる。

肉 親

田 中 克 己

おまえは私より一つ下で
七十歳を越えて死病にとりつかれた
おまえは夫のせいでその一男一女の
結婚披露にも私を招かなかった
点滴で生きていて二ヶ月で死ぬと
おまえの義甥の診断だそうだが
痛みはとれたそうだが
私はもう見舞にゆく元気もない
「四季」の編集を今やっとしおえた。
その発刊の時おまえはもう死んでいると
私はたしかに信じている。

錆・詩人ロルカに

石濱恒夫

ひとの世の悲しみに追われて

あてない旅の極み

あのベンガル湾の青い海や白い砂

南インドの赤い土やみどりの茂りに

似ているだろうか

あなたの眠っているグラナダの風景は

ひらいたまっ赤な薔薇の傷口から

かわいた砂が吸いこんだ血液の拡がり

みどりの三本のオリーブの

まんなかの木の幹に刻まれた

黒いちいさな十字架

その地面の下にあなたは横たわる

スペインへは訪れたことはなく

ジプシーたちの月夜も知らないし

グラナダの夕陽もまだ見ないが

フェデリゴ・ガルシャ・ロルカ……

あなたの体内の銃殺弾の錆いろが
いま、わたしの気にかかっている

座席

小杉茂樹

東京の
環状線電車が
渋谷方面から五反田を通過
品川に
さしかかる途中
急に
傾斜しはじめる

電車は蛇行
湾曲のまま
車体は左へ大まわりするとみえ
遠い一輛の
窓に
じぶんの考えていたとは反対の
側に
残光が跳ね反っていた
遠い日の
ぼくのような……

ゼーヤ河

大野沢緑郎

コルチャックやデニキンが何者で
ぶち毀しにやって来た日本軍で
うろうろし逃げ廻り抵抗し
ローラーのように踏み潰され
合切焼き払われた というのだ
アメリカもドイツもやったじゃないか
といってもげんに眼の前に
生身のまま気缶がまに放りこまれた
半身が生きているのだ うずくまってぼそぼそ物語っているんだ 皺く
ちやが三〇年の孤りを風景のまま荒涼と過してきたのだ
野獣の日や無残な果てを
ふるびたプラトークのまんま

フィルムの駒みたいに待ってたみたいなんだ
とてつもない水量と迅い流れの叢で
独りのぶつぶつがとぎれては突きささり
おいてきぼりを喰った突端で
広い空の遮断の淵で
奇妙であたりまえな廻り合いなのだ
審判なんかがあればとつくの昔とび超えてるんだ
ただ手のとどかない対岸を
ひろいひろい流れのむこう
過ぎ去ってしまったいっさいを
孫みたいたなおれたち捕虜とうつろに追っているだけなのだ

スタルシンカ
老婆よ

プラトークⅡ スカーフ、ショール、正方形の肩掛

密林

熊の蹠から雪は深く 落葉松のしたでポルチ
ヤンカを捲き 狼にはマツチを忘れず 紫け
むる山並みのはては間宮海峡であろう ダイ
ナモ一晚中にぶい音たて 巨木の下敷きにな
った死体はタンカにおかれたまま 焚火のし
たで十年の歳月を手とり合った兄弟や ぶっ
倒した檜の大風呂でどうぶり郷愁につかつた
り ブルドーザー伐採場までトラック道押し
上げ 栗鼠がちよろちよろし 見えない谷川
かすかに音たて残雪に草萌えする頃 突然日
蝕のヴェールが垂れこめ獣と鳥たちのもの凄
いざわめきが山を掩った そうしてうんざり
するダモイが今度こそ本当らしく森中に拡が
り仲間たちの墓標がセルゲイフカの山ふとこ

ろに囲われ モスクワの不良少女どものラー
ゲリが一晚で消えていたり 捕虜たち用のパ
ン焼小屋がとりこわされて ついにむんむん
する若葉の山路を降りた ダ・スピダーニヤ
底知れぬ密林 タイガよ

ポルチヤンカ||脚絆(ロシア語) ダモイ||家へ、故郷へ(ロシア語)
ダ・スピダーニヤ||さようなら(ロシア語)

ラーゲリ

慟哭する力もなく下痢する

栄養失調の手さぐりの

この物々しい囲みはなんだ

硬直した今朝までの生き者の

想い出や望みはいま一片の水のかけらもない

それより ころがっている煉瓦まで黒パンにみせた

ワシリー・ポヤルコフの昔から

手かせ足かせとてつもない広野を世の果てに

はじめてのヤポンの群れから

せめて虱だらけのシューバがかけられてあっただけの

冷凍魚よりぶざまに積み上げられた馬櫓から

襦袢袴下まで剥ぎとって雑木林に蹴こました

強盗どもの論理はどこにあるんだ

あったのは零下四〇度凍結の冷笑だけだ

かき集めるだけかき集め高粱ガユも出せない

眩野に羊みたいに駆りたてた

ひげのカリスマのあざ笑いだけだ

そしてくる日もくる日も

いたるところ死霊の漂泊する

重く 低く 凍える空だけが

ぶざまな裁判にかけられている祖国くにに

つながって向いたままに動かないのだ

ラーゲリ＝コンツラーゲリ（俘虜・危険人物などの）収容所（ロシア語）

レンブラント賛歌

小高根 太郎

青春の栄光と幸福と、富と愛とも一切を失な

った、うらぶれはてた老人の顔。

けれどその二つの瞳は、夕映えの明りのよう

に、おだやかに深く、みつめている、この世

のはかない有為転変を。

飢えをしのいで画筆をとり、鏡の中の自分の

顔を、カンバスの上に描きだす、その一筆一

筆に命をこめて。

大先生、あなたは真の達人でした。

あなたは飢えて死んだけれど、あなたの最後

の自画像は、私の魂をゆりうごかす。

拾い屋安吉

福地 邦樹

駅の自転車置き場の隅におっさんはダンボール箱をつぶして積み重ねる

拾い屋のおっさんの名は安吉

シャツの背中にマジックで大きく書いてある

自転車に上等なラジカセを積んで演歌をがならせながら走りまわる

白髪を茶色に染めてカウボーイハットをかぶり赤ら顔にするどい眼付き

時に真白のジャンパーなど着てなかなかいきな出立ちだ

自転車置き場にはリヤカーで運んだボロ洗濯機さびたオープン

つぶれたテレビなどなども積み重ねてあって

安吉おっさんを恐れて誰も文句をつける者はいない

おっさんには家族があるのか誰も知らない

しかしあの陽気で傍若無人な生きざまは

周囲に何か教訓を与える迫力がある

子供をからかうおっさんは

なかなか人気があるのである

目覚め

石山直一

私がいま、ここで
このようにして、この齡まで
生かされているのは
何という不思議
偶然と言ってしまえばそれまでだが
偶然の世界には意味がない
私だけでなく、ついには
世界の一切の存在していることが
虚しくなってしまう

目を覚ましてみれば
世界の一切は虚無
それとも
目を覚ましてみれば
世界を貫く真実の愛
たがいに、無限に遠く、無限に近く
この二つの切り結ぶ一歩手前で
そのことをちらちらと感じながら
私達はうとうとして
生き続けているのだろう

古都早春

坂口允男

節分の夜の 闇は深い

春日の万灯籠の光も

高い杉の梢まで とどかない

朝、飛火野に

真白な霜が置いて

鹿の吐く 息も白い

片岡に梅が一輪 開いたが

雪消の沢に 薄氷が
うすらひ

日にきらめく

おほいぬぐふり はこべらや

なずなの花咲く 野の道に

風がまだ冷たい

詩と音楽を こよなく愛した

友がみまかった日

みささぎの池に 鴛鴦をしが眠っていた

希望の芽

花井タツ子

家並みの木の葉の緑は

日々輝やきを増すも

指先は凍ごえて

頬を刺す空気冷く

歩み来る幼な児ほむれば

言の葉のたどしくて

来し方と行く方指して

かわゆき目われにむけたり

老いてゆく疲れし心に

希望の芽吹き込まれしごと

すがやかのかわゆき目なり

手の甲は赤くしもやけ

手袋ははめぬ幼な児。

終電車

南川 正純

黒髪が、はためいている車窓
君の髪が、私の頬を撫でた
ハッと、振り向いた目は笑っていた
涼しそうな瞳
長い髪は肩を越している
そして、細い「うなじ」をたたいている
ジッと、おさえた白い指
紅いルビーが燃えていた。

風が、柳の髪をまたないだ
甘い香りが流れた
白いうなじ、薄化粧 涼しい瞳
さざ波を立てている髪
後れ毛が数本、窓ガラスに映っている
赤いインクが、しみる様に
私の胸に解けて行った
若い頃に別れた、あの人の面影だろうか
電車が停った
みどりの黒髪をなびかせながら
ほのかな香りを残して消えた
終電車
信号燈の青が、レールに映っていた。

同人略歴(3)

松枝茂夫

明治38年 佐賀県有田町に生まる。鹿島中学、福岡高校卒。

昭和5年 東大支那文学科卒。直ちに北京に遊学、満洲事変により1年有半にて帰国。

昭和7年 以後8年間、上智、明治、慶応、法政等の諸大学の支那語講師たり、貧を極め、ついに翻訳を業とするに至る。

昭和10年 中国文学研究会同人となり、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫、増田渉らと親交を結ぶ。

昭和14年 九大講師、ついで助教授となる。

昭和22年 東大助教授に転じ、在職1年半、家庭の事情により辞して帰郷し、「紅樓夢」の翻訳に従事す。

昭和25年 「紅樓夢」の翻訳を完り、北九州大学教授となる。

昭和27年 上京して東京都立大学教授となる。

昭和44年 都立大学退職、名誉教授となる。早稲田大学教授となる。

昭和51年 早大退職。

著書 「中国の小説」(昭23、白鳥書院)

訳書 「紅樓夢」(初訳本13冊、改訳本11冊未完岩波)「聊齋志異」(共訳、平凡社)、「三言二拍抄」(平凡社)、「歴代笑話選」(平凡社)、「水滸伝」(抄訳岩波)、「孽海花」(平凡社)「浮生六記」(改訳本、岩波)、「陶庵夢憶」(岩波)「思痛記」(宝雲舎)、「蜀碧・揚州十日記・嘉定屠城紀畧」(平凡社)、「模糊集」(生活社)、「記録文学集」(平凡社)、「中国の西北角」(改造社、筑摩書房)魯迅8冊(岩波、旺文社、筑摩書房)、周作人6冊(改造社、創元社、富山房、実業之日本社、文求堂、筑摩)沈從文「辺城」(改造社)、郭沫若「北伐」(改造社)、曹禺「蜕变」「日の出」(共に河出書房)外に「支那文を読む為の漢字典」(文求堂)、「左伝」(徳間書店)、「中国名詩選」(上、中、岩波)、など。

同人名簿

(順不同
*は名誉同人)

*植村清二	176	練馬区桜台6-8-5
岩崎昭弥	502	岐阜市近島232
*石山直一	559	大阪市住之江区住之江1-3-10
*牛尾三千夫	699-42	島根県邑智郡桜江町市山474
*小高根太郎	156	世田谷区桜1-63-6
高橋しげおみ	632	天理市三島町100
福地邦樹	578	東大阪市新庄241-17
江頭彦造	167	杉並区下井草2-16-12
川村欽吾	036	弘前市豊原2-3-35
*小杉茂樹	421-05	静岡県相良町波津762-2
伊達温	565	吹田市尺谷24-5
*野田又夫	602	京都市左京区松ヶ崎三反町5
坂口允男	630	奈良市高畑大道町1232
金井寅之助	670	姫路市野里慶雲寺前町707
石濱恒夫	558	大阪市住吉区墨江2-5-6
*松枝茂夫	167	杉並区本天沼2-37-21
山住正己	166	杉並区阿佐谷南1-38-2
*藤沢桓夫	558	大阪市住吉区上住吉2-12-4
*高田瑞穂	157	世田谷区成城2-4-20
田井中弘	520-03	大津市伊香立下在地町914
*矢野峰人	158	世田谷区深沢2-14-17
*浅野晃	151	渋谷区本町3-32-1-1004
田中克己	166	杉並区阿佐谷南1-40-8
*河村純一	522	彦根市中央町7-5
高橋渡	158	世田谷区奥沢1-63-5
花井たづ子	176	練馬区旭丘2-36
大東幸子	574	大東市諸福3-6-10
大野沢緑郎	235	横浜市磯子区上中里町1028-3-311
藤野一雄	522	彦根市本町1-8-27
森亮	572	寝屋川市木屋町10-18
国友則房	184	小金井市本町3-1-20

LIEBERMANN WAELCHLI & CO.,S.A.

Marketing Distribution of Consumer
and Investment Goods.
Negotiations of Licensing Agreements.
Financial Services and Export.

TOKYO · OSAKA · SAPPORO
SENDAI · NAGOYA · FUKUOKA

Established in Japan since 1919

大阪支社長 中西 和也

旧制大阪高等学校第23回文科甲類卒業

同人規定

1. 同人は田中が『四季』にふさわしい作家を選び、毎号のせることとする。
1. 老大家*以外は同人費として投稿毎に2,500円(送料共)を納めること。
1. なるべく常用漢字、常用かなづかいを用いること。(短歌・俳句・川柳・引用文等は別にする)
1. 当雑誌を各方面に広く配布してもらい、売却金を刊行元に送金してもらいたい。(郵便振替 東京8-132924四季社・送料引)
1. 同人に適当な人があれば紹介してほしい。

会員規定

- 会員は男女職業年齢を問わない。
旧『四季』を閲覧し、堀辰雄氏を愛した経験のあるものに限る。
- なるべく常用漢字、常用かなづかいを用い、創作であること。
(2ページ分が望ましい)
- 会員費として4ヶ月分2,000円(送料200円)を、振替 東京8-132924 四季社まで納入してほしい。
- 同好者を誘ってもらいたい。
- 詩を送ってもらいたい。(締切 5 月末日)

季刊 四季 第六号 定価300円(送料200円)

発行 四季社

〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-40-8 田中克己方
電話 03-314-2783

印刷 有限会社 カルチュ・プロ

〒532 大阪市淀川区西宮原1-6-60 電話06-391-3133代